

萬鉄五郎 生命の爆発展

萬鉄五郎記念美術館は、5月1日開館30周年を迎えました。これを記念して、企画展「萬鉄五郎 生命の爆発展」を開催中です。

30年の研究と収集実績を踏まえた萬鉄五郎研究の集大成。萬は初めてという方にも分かりやすく、その業績を紹介。また萬愛好家の方にも充実した解説と関連資料で萬芸術の本質に迫ります。この機会にぜひ萬鉄五郎記念美術館を訪れてみませんか。

6月29日 (日)まで



■土・日曜日は、ふるさとパスポート、まなびキャンパスカード持参で、小中学生は入場無料になります

萬鉄五郎記念美術館ではこれまで油彩や水彩をはじめ素描や資料、合わせて約550点の萬鉄五郎作品資料を収集。また、萬に関連する明治大正期の画家の作品もコレクションし、多角的に萬を検証してきました。さらには美術の普及活動や、アートによるまちづくりの拠点としての役割も果たしてきました。

この30年の研究の成果を踏まえた集大成が今回の企画展。その概要について中村館長に聞きました。

◇ ◇ ◇

1 今回の企画展の見どころはどこでしょうか

11歳の頃からの初期の作品から、東京美術学校時代、土沢時代、東京・茅ヶ崎時代と萬鉄五郎の制作の変化を通して見るることができます。

萬鉄五郎は1885(明治18)年、花巻市東和町土沢に生まれました。幼いころから絵を描くのが好きだった萬は、東京美術学校(現在の東京芸術大学)に学び、卒業制作に提出した『裸体美人』(東京国立近代美術館蔵重要文化財)は、ゴッホやマチスといった西洋の新

しい美術思潮の感化を受けた作で、教授陣から反感を買った問題作でした。この作品を皮切りに前衛画家として歩み始めた萬は、赤や緑の強烈な色彩と、大胆な筆使いによる新しい表現を繰り広げます。

『裸体美人』『太陽と道』もたれて立つ人』など、驚くような表現をしたのが、従来の芸術的枠組みからの解放をうたいあげた萬の「爆発」で、近代の絵画の道を切り開いたと言えます。対象を写生するだけの絵画で終わっていたら、今日の萬鉄五郎の評価はなかったはず

3 今回の展示で注目の作品を紹介してください



『太陽と道』
1912(明治45)年ごろ
油彩・板

これは、明らかにゴッホの感化が読み取れる作品ですが、ゴッホを超えようとする萬の姿勢が見える作品です。

2 30周年企画展としてこのテーマを選んだ理由は

萬鉄五郎の芸術創作の本質が「生命(いのち)の爆発」だったからです。萬は、1923(大正12)年に雑誌で、芸術の意義について「刹那的に爆発することが尊い」と語り、永久に爆発し続ける画家にとって油彩や水彩、水墨の別はなく、ただ何をもってしても「生命を爆発させることが芸術だ」と語っています。萬もピカソも優れた芸術家は、内面から発する力を「生命の爆発」という形で表現しているのです。

岡本太郎が1970年代テレビで「芸術は爆発だ!」と叫んで人気を博し、流行語にもなりました。その50年も前にすでに萬は「生命を爆発させることが芸術だ」と表明していました。そのことをまず、皆さんに知ってもらいたいのです。

子どもの頃の水彩画を見ても萬は非常に上手です。東京美術学校時代も常にトップクラスの成績を挙げた技巧を持っていました。しかし、そのことに安住しないで、いろいろな表現を試み、自分の内面から湧き上がる、絵に対する情熱をどんどん限りなくつくり上げていきました。画家にとって表現を追求していく中で、これでよいということはないのです。画家は永遠に前を向いて努力をしなければならぬ。そのことに一生を懸け、制作に打ち込んだ萬鉄五郎。その画家としての生きざま、すなわち「生命の爆発」を見て感じてほしいと思います。

「生命を爆発させることが芸術」



●萬鉄五郎記念美術館 館長 中村光紀

中央大学法学部卒、岩手日報社入社、同社で数々の美術展を企画開催、岩手大学教育学部講師

萬鉄五郎記念美術館では、市民の皆さんが美術に親しむことができるように、毎年館長による講座を開催しています。ことしは次の日程ですのご参加ください。

■萬鉄五郎記念美術館館長講座
— 絵画の見方とその歴史 — Ⅲ

■期日と内容
6月21日(土)
「近代美術の父『マネ』」
7月19日(土)
「印象派の代表『モネ』」
8月23日(土)
「女性美を謳いあげた『ルノワール』」

* いずれも午後1時30分から午後3時まで

■会場 東和総合支所第1会議室

■定員 50人

■申し込み方法等 対象は高校生以上の市民。受講料は無料。6月6日(金)以降に電話かファクスで下記へ申し込みください

■問い合わせ・申し込み

萬鉄五郎記念美術館
(電話・ファクス 0198-42-4405)



『心象風景』
1913(大正2)年ごろ
油彩・板

1913(大正2)年ごろ、抽象的な表現が試みられた油彩作品。萬は抽象絵画の創始者といわれるカンディンスキー(1866〜1944)を知っていたと思われるますが、抽象表現としては、世界的にも早い時期の作品です。



『軽業師』
1912(明治45)年ごろ
油彩・板

美術学校を卒業した1912(明治45)年ごろに描いた作品。浅草サーカスの真っ赤な台に、羽織を着た曲芸師が、人間の入ったタライを足で回している場面で、人物の形や色彩、単純化した表現は、フォヴィスム(野獣派)の先駆をなす作品です。